

「いのり☆フェスティバル」(東京)

信仰祭典アニメも話題に

「教会、団体、企業、学校、サークル、個人が一堂に会する国内唯一の祭典」



「いのり☆フェスティバル」が実行委員会主催で、9月29日、東京御商センター展示場(東京都)で開かれた。写真。いのちのことば社などの企業や、ゴスペルで宣教を進めるグループ、マンガ家など、24の団体・個人が

「フリーマーケット」のようなかたちで出展。ライブや、食材を通して聖書の世界を「味わう」ワークショップも催された。

「オタク」という言葉を考案したことも知られる作家・評論家の岡田斗司夫さんと、牧師の関口康さん(日本キリスト改革派松戸小金原教会)、僧侶の吉村昇洋さん(曹洞宗普門寺副住職)による鼎(てい)談は、「カミとホトケと、時々、オタク」と題して2時間余り行われた。岡田さんは、キリスト教や仏教の考え方にどうしてアニメの話も交

えて説明。会場には若者も多く、たびたび笑いが起こった。関口さんや吉村さんが教職に就いた理由についても興味深そうに聴き入っていた。

上智大学神学部で学ぶ野口結貴さんは、ツイッター(インターネット上の短文投稿サイト)の告知を見て来場。「ミッション校の友人の間でもアニメの話は多い。キリスト教のイベントでもアニメがある行きやすいのでは」と興味を持ったという。仲間と立ち上げたグループとして、小説、自主制作CDなどを販売した大学院生の浦田剛さんは、「一人一人が輝けるような社会や共同体をつくっていく」方向性が、このイベントに感じられて初参加したと話している。

ドン・ボスコ社のプーアスを担当した小野久美子さんは、「いわゆる『オタク』が多いと思って品ぞろえしましたが(笑)。マリア様の容器に入った聖水も出ますね。聖水について聞かれたり、ロザリオの冊子も売れてます」。

「いのフェス」は、「キリスト教につながる人々がさまざまな枠を超えて集い、出会うことで、普遍的な祈りの精神」を発信したいと企画され、今年で2回目。実行委員会代表の松谷信司さん(キリスト新聞社)は、今年も教会「関係者」による枠を超えたつながりが数多く生まれたことに手応えを感じており、今後も続けたいと話す。当日は約250人が来場した